

須磨学園 復権へ光

中盤競り合い V 争う

須磨学園のアンカー下主将が2位でたすきを
受けた時、前を行く豊川との差は6秒だった。だが相手はすばぬけたタイムを持つケニア人留学生。優勝するには先頭で立ち、「20秒は離しておきたかった」（長谷川監督）。走り始めると相手の背中は遠のくばかり。勝負はすでに決まっていた。

区間の前半に突っ込み、終盤に粘れず失速する。その「マイナス数秒の積み重ね」と長谷川監督は総括する。2区池田は集団を引っ張る積極性を見せながら「足が止まってしまった」と区間5位。3区区間賞の中新井も豊川の前には出られなかった。続く原も「ラスト1キロで踏ん張れなかった」と唇を噛んだ。

焦りがペースを乱した。須磨学園の武器は、全国総体1500位2位の池田ら、厚い中距離の選手層。距離の短い2、4区は優位なはずだったが、最終区にエースが控え、余裕がある豊川に対し、リードを稼がねばならない状況が「重圧になった」と指揮官は話



女子 2位

一方で、有力外国人を擁する相手と競り合えたのは好材料。5人全員が粘れば、エース勝負で劣る分も補える可能性を示した。「最初から勝てないと思っはいけない」と長谷川監督。覇権奪回の道筋も示す2番だった。(伊丹昭史)

女子・須磨学園3区の中新井美波(右)から4区の前夏紀にたすきが渡る(撮影・笠原次郎)

中新井 猛追で区間賞 3区

○：須磨学園の3区中新井が猛烈な追い上げで区間賞を獲得。前半から強気で攻めると、終盤の上り坂で一気にスパー。3位から2位に順位を上げ、スタート時に19

秒あった先頭との差わずか4秒に縮めてみせた。昨年4区で区間3位に入り、「今年は区間新を狙っていたと中新井は喜んだ。今年からは1区からスタート時に19秒あった先頭との差を、持前のスピードを發揮した。ただ、1番前に出ることはかなわず「もう少し距離があれば…」と残念がった。小学6年から1型糖尿

三木粘り強く流れつくる 1区
○：須磨学園の1区三木が粘り強い走りで行流れをつくった。
この数年、チームは1区で出遅れる展開が多かっただけに、「とにかく食らいつこうと必死だった」。4区すぎの上り坂で先頭集団から遅れたが、「ここで離されたら自分の負け」と奮起。残り1キロで前の選手をかわし、トップとの差を16秒にとどめ、6位で2区の池田につなげた。
昨年は体調を崩し、数カ月も満足に練習できない状態が続いた。「あの時のことを思うと、きょう走れたことがうれしい。みんなに感謝したい」と涙ぐんだ。